

# 働くことについて経済学で考えてみよう

久米功一（「労働経済学」「ワーク・ライフ・バランスの総合政策」担当）

## 1. 労働経済学とは

私たちにとって、「働く」ことは、自らの幸福を追求し、社会の繁栄に貢献するための手段のひとつです。そして、私たちは、この「働く」ことに生涯の多くの時間を費やしています。その形はさまざまです。会社で8時間働く人、4時間働いて家事をする人、転職する人もいれば、自ら事業を起こす人もいます。それぞれに事情を抱えながら、その人なりに一生懸命に働いています。労働経済学は、こうした人びとと仕事の組み合わせ、働き方、賃金・労働時間の決め方などについて、理論的・実証的に分析することによって、人びとが自尊心と共感をもって生きていける社会の構築を目指す学問です。

## 2. 一つの例—労働市場

私たちは、労働力を売り、企業は、その労働力を買って生産活動を行います。この労働力を売り買いする場を労働市場といいます。いま一つの例を挙げてみましょう。

さて、質問です。かつては、5万人がこの仕事に就いていたが（当時の就業人口3500万人、700人に1人）、高度成長期とともにいなくなった…。この仕事とは何でしょうか。

それは…「紙芝居師」という仕事です。高度成長期直前の日本には、子どもたちの娯楽に「紙芝居」がありました。木戸銭を払うともらえる駄菓子を食べながら、子どもたちは我を忘れて紙芝居に没頭したのです（図1）。子ども600人につき1人の紙芝居師が存在していましたが、テレビの普及とともに、消えてしまいました（吉川1997）。

図表 1. 活躍した紙芝居師



※出所：昭和31年、福岡市南区若久。撮影者：北島寛さん

紙芝居師はその後どうなったのでしょうか。いまでは路上や公園で紙芝居師をみかけることはほとんどないでしょう。しかし、紙芝居師は、全く無くなったわけではなく、わずかながらも根強い支持を得ていたのです。安野侑志さんという有名な紙芝居師がいました（2012年にご逝去されました）。京都を中心に40年近く活動し、晩年は、年収1000万円以上を稼ぎました（図表2）。「定年もなく、楽しみながら子どもにも喜んでもらえる。不況のときこそ活躍できる仕事」といいます。

図表2. 紙芝居をする安野さん



※出所：ZAKZAK 2009/02/24

紙芝居師の労働市場を振り返ると、さまざまな疑問がわいてきます。「なぜ高度成長期前の日本で紙芝居が流行ったのか」「5万人いた紙芝居業者はどこに行ったのだろうか」「今日、なぜ高収入の紙芝居業者が存在するのか」…。ある仕事に人気が集まる、その仕事が廃れる、ある人の賃金が高まる、ある人が仕事を失うといった事象は、なぜ起こるのか、なにをもたらすのか？ こういう問いについて労働経済学は考えていきます。

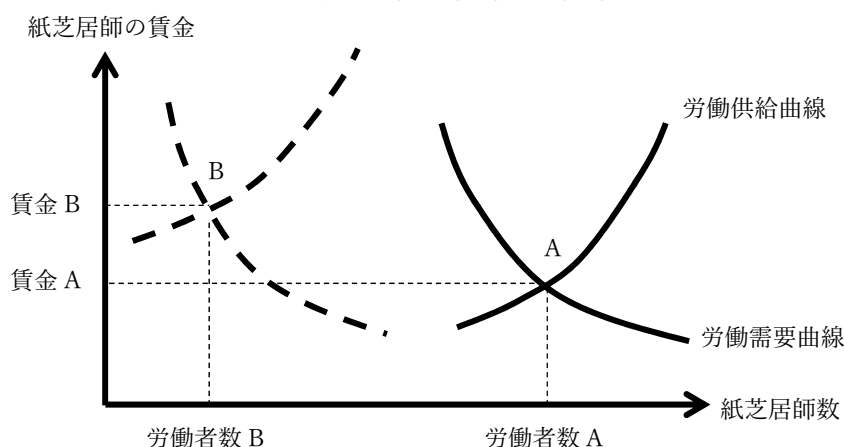
### 3. 需要と供給で考えてみよう

経済学には、需要（買い手）と供給（売り手）が一致するところで取引が行われる、という基本的な考え方があります。取引される価格が高いほど、売り手が多く現れますが、買い手の数は少なくなります。逆に、価格が安ければ、買い手は増えますが、売り手は少なくなります。こうした性質について、縦軸を価格、横軸を数量として、需要曲線と供給曲線で表すことができます。

紙芝居師の労働市場を考えてみましょう（図表3）。この市場では、紙芝居師の労働力が取引されます。かつては、たくさんの需要（紙芝居を楽しむ子どもたち）とたくさんの供給（多くの紙芝居師）が存在して、図表3の点Aで、紙芝居師の労働の価格（賃金）と数量（人数）が決まっていた。しかし、現在では、テレビなどの娯楽の普及や子どもの数の減少により、紙芝居師に対する需要が減少し、同様に、紙芝居師を志す人（供給）も少なくなりました（図表3の点B）。

では、前述の安野さんのように、紙芝居師の収入が高くなったのはなぜでしょうか。それは、紙芝居に対する需要の減少以上に、紙芝居師が少なくなり、その希少性が高まったことが考えられます。それだけではありません。いろいろと難しい世の中となり、対人能力が求められるなかで、子どもたちへの読み聞かせが見直されています。そこへきて、紙芝居師の卓越した話術と子どもたちを魅了する人間味を再評価する向きがあります。こうした背景もあり、現在、紙芝居師は、そう多くいませんが、全国各地を忙しく飛び回っているそうです。

図表 3. 紙芝居師の労働市場



#### 4. 人びとの「働くこと」への思いに寄り添って

紙芝居師という仕事の変遷についてみてきました。需要と供給という経済学的なものの見方はたいへんシンプルですが、起きている事象を説明するためのひとつの手がかりを与えてくれます。この例に限らず、世の中には、たくさんの方がさまざまな形で働いています。情報化・グローバル化・テクノロジーの進展といった時代の流れの中で、いかにして生計を立てるか、自己実現をするか、働く一人ひとりの背景には、それぞれの決断と気概があります。労働経済学では、こうした思いに寄り添いながら、経済学的手法によって、働くことに関するさまざまな課題の解明と解決を考えていきます。

#### 参考文献

吉川洋（1997）『高度成長—日本を変えた 6000 日』読売新聞社、  
（2012 年に『高度成長』中公文庫として文庫化されました）